宇都宮エスペール賞選考準備委員会

第２回会議録（概要）

1　会議名　　第２回宇都宮エスペール賞選考準備委員会
2　議　題　　（１）募集対象分野について
　　（２）選考について
　　（３）募集書類等について
　　（４）選考について

3　開催日時　平成 13 年３月９日（金）午後１時３０分～４時
4　開催場所　市役所１３階　教育委員室
5　出席者氏名　委員＝上野憲示委員，田渕進委員，谷新委員
　　吉原郷之典委員，若林治美委員
　　事務局＝桜井文化課長，西田文化課課長補佐，菊池主査，大垣主査
6　公開・非公開の別　　公開
7　傍聴者の数　　０人
8　発言の要旨

（１）　募集対象分野について

○美術と音楽を柱としてその他の芸術を入れていく，方法についてはいくつか考えられるのではないか。
○懇談会では全分野で行なうとなっている。美術と音楽を中心に行なうことで違和感はないか。
○1 年おきに行なうことで比較的選考もしやすいし，それほど違和感もないのではないか。宇都宮で活躍している人は，美術と音楽が多い。その他の分野についてはそれほど多くないと思う。
○原石を市民に認めさせる説得力はなかなか大変だと思う。
○応募する側から考えると，年度ごとに分けるというのは，どれくらいなじむか疑問。毎年チャンスがあると事業が広がりやすいと思う。毎年全分野を対象にして，選考の中で柔軟性を持たせる方法もあるかと思う。
○選考委員は応募状況がある程度確定してからではまずいのか。
○あらかじめ依頼しておくことが必要かと思う。
○単年度の選考委員の枠は何人を考えているのか。
○委員が多いと意見がまとまりづらい。全分野の選考委員をお願いすることは，現実的には不可能。5 人程度がふさわしいと考えている。その中で１人は地元に精通した委員を考えたい。そして，選考委員のほかに市からの代表を入れたいと考えている。

○美術と音楽を中心に委員を設定していても，その他の分野から候補者が出てきた場合の選考委員の対応もある。
○専門性はあるが他の分野もある程度目配りができる委員をと考えている。
○分野については 1 年おきにギャラリーとして美術，ホールを除くその他の分野，ホールとして音楽，ホール関係のその他の分野としたほうが一般にはわかりやすい。
○選考委員の選び方と人数は例えば，音楽と美術の専門家が同席して候補者を選考する場合，微妙なところで意見の食い違いがあり，やりづらいことが予想される。
○美術と音楽を毎年交代で行なっても，全分野を対象にしているからにはその他の芸術の審査委員がいなかったらおかしくなる。
○選考委員を全分野から専門家にお願いするのは非常に難しいので，その他の分野で受賞対象になるような人が出てきた場合は，事務局でできるだけ詳しい情報を入手し，選考委員会で検討していただくことになると考える。芸術全般に造詣が深い人をお願いしていく。
○部門については，ホール部門として括弧でくくり，例えば音楽，舞踊，演劇その他としたほうが不公平感はない。
○ギャラリーの中に文芸，茶華道，古典芸術は表記しづらいのではないか。古典芸術はホールと美術の両方にかかってくる。
○概ね，舞台を使う芸術と壁面，床などを使う芸術に分け，例示を入れて応募者に混乱のないような表記としたい。
○一般の人に分かりやすくするために，例えばギャラリーの場合は絵画，彫刻，インスタレーションなど，ギャラリーでの展示を想定した芸術。ホールの場合は，音楽，演劇，舞踊，パフォーマンスなどホールでの発表を想定した芸術と表記しておけばある程度類推できる。
○文芸，茶華道はその他に入れずに表記する。これまでのご意見を参考にさせていただき事務局で整理をすることでよろしいか。

―了承―

（2）選考について

○必要な書類等は，作家の経歴，これまで発表してきた作品資料，新聞・雑誌の評論記事，本人の芸術に対する考え方を書いたもの，推薦者からの推薦理由。選考委員は，募集の段階で公表することにより応募者も真剣になってくる。
○一流の選考委員が選考するということであれば，告知したほうが宣伝効果もある。
○例えば，選考委員の中に美術関係者だけであると他の人は応募をあきらめてしまうことがある。

○通常の賞であれば審査委員は事前に公表していく。この賞の選考委員も事前に告知していくべきだ。
○事前に公表した場合，ある分野だけに限った選考委員であるといかがなものかという不安がある。
○全分野から専門の人が委員として選考委員に入れば問題はないのだろうが，予算等の限度があるので，どこかの分野が欠けるということが問題ということか。
○応募の段階で，その他の分野で受賞対象になるような人がでてきた場合は，その段階でしかるべき人にお願いすることがある。
○常任委員，臨時委員という考え方もある。
○中央の著名なジャーナリストおよび芸術人などという表現ではどうか。
○発表の段階では選考委員は全員公表する必要があると思う。
○賞の権威付けのためにもその必要がある。
○どんなにバランスをとろうとしても，どこかでひずみが出る。回数を重ねていく中でイメージができてくる。
○中央の選考委員が，事前の絞込みなしにいきなり選考というのは難しい面がある。事前にふるいにかけることが必要と思う。
○ある程度の人数の絞込み作業が必要。
○1 次の絞込みを地元の先生方にお願いすることは，ひとつの方法としてある。
○厳密に審査を行なおうとすれば多大な労力がかかる。どこかである程度簡略化していく必要がある。
○例えば，音楽だけであれば実際の演奏を審査することもできるかと思うが，多種目ある場合，評価することは難しい。実際ものを審査することは不可能。
○ある程度事務局で候補者を絞っても良いのではないか。
○事務局での絞込みは難しい。専門の先生方に判断してもらうしかない。
○専門の委員でも，レベルの優劣の判断をするのはつらい。
○候補者を推薦することはできても，審査することはむずかしい。
○絞込みを行いその後は，中央の委員に任せる。いろいろな賞があるが比較対照はむずかしく，最終的には何らかの判断となる。
○この賞は，本人の考え方や推薦者がどういう視点で今後育てていってもらいたいかなどについて十分判断する必要がある。レベルの優劣についての判断も必要だが，それ以外のところで選考委員会では，委員のネームバリューと，この人を選んだという自信を持って選考すればよいと思う。
○今後，宇都宮とのかかわりを持つことや成長していくことなどについて，本人の考え方が重要だ。
○分野が違っても，大体同じくらいのレベルに達している人は，考え方も同じような可能性がある。

○毎回，選考の視点が変わってもよいと思う。毎回同じ尺度で測るのではなくて，例えば，粗削りではあるが何年か後の成長の可能性で選ぶなど，現在のレベルが素晴らしいかどうかということだけでなく，判断は毎回変わってもよいと思う。それが，この賞の個性であると思う。
○作品をプレゼンテーションさせ，作家の考え方等を聞き選んでいくという例がある。作家が面接で，考えについて十分に審査委員に伝えることが重要。面接のウエイトが大きくなるのではないか。
○本人の考え方を十分引き出し，本人の考え方に対して賞を与えていくということであれば，全分野に精通した委員というのはあまり関係ないかもしれない。また，選考委員は５人も必要ないかも知れない。
○１次で絞られた人たちは，相当なレベルの人であるから，面接でその人の人となりを探り，選んでいくことが妥当だ。
○賞の比較での選考は良くないと思う。
○書類の審査ではレベルの比較となると思う。
○最初の審査はレベルの比較でよいと思うが，煮詰まってきた段階では本人の考え方が重要。
○後追いはしないといっても，実績は見ることになる。
○原石を見つける手立てとしては実績と思う。
○推薦者の必要性についてはどうか。
○間口を広げておくためにも絶対必要な要件とはしない記載としていきたい。
○選考委員の募集要項への記載についてはどうか。
○先ほど言われたような記載としていきたい。
○中央で活躍するジャーナリスト，あるいは芸術家といった漠然とした表現がふさわしい。
○予備審査的なところ（絞込み）を地元の先生方にお願いする考え方がある。
○できればジャーナリストであれば公平になる。
○実際の作品等を審査していくことは難しい。１次選考で書類等，２次選考で面接により考え方について聴くという形かと思う。
○美術の場合，展覧会等で作品を発表していれば審査委員も見る機会はあるが，それがないと具体性がなくなる。
○作品に変わるものが写真やビデオなどの資料となる。
○場合によってはプレゼンテーションの場を提供する。作品等を出す，出さないは自由とする。
○１次選考と２次選考では方法が違うと思う。時間的なことを考えると限度がある。確かに実物を見ることは良いのであるが，多分野にわたるので選考に不公平感が出てくるのではないか。十分ではないかもしれないが，ある程度のところで審査する

しかないのではないか。

○１次で選ばれた人は皆，甲乙つけがたい。２次審査では作品などの実物より人物で判断するしかない。

○作品は実物を審査委員に見せたほうが有利。しかし。持参できないものもある。公平でない。作品の良し悪しについての審査はあまり意味がないのではないか。

○作品については審査委員に任せるという方法もある。絞り込まれた人たちに対し，個別に作品やコメントなど持ってこさせるものを任せる。

○あまり厳密にしてしまうと運営に支障をきたすのいではないか。

○１次審査で何人に絞るのか決めておく必用がある。

○受賞者が一人なので１次審査でできるだけ絞り込まないと，２次審査が大変になる。

○３人か５人に絞る。２次審査でじっくり審査してもらう。

○１次審査では５人以内を見当に絞り込むことでよろしいか。

―意義なし―

（３）応募書類について

○１次審査ではどのようなものが必要か意見を伺いたい。

○１次審査では面接をする時間はないと思う。推薦の場合は，推薦理由，本人の考え方を文章で書いてもらうことはどうしても必用だ。１次では面接は必要ない。

○１次では書類で審査をせざるを得ない。２次審査では面接を交えて委員から考え方について質問し，選んでいく方法が良い。２次審査では参考資料として写真ファイルで応募する。

○参考資料は美術の場合，写真やビデオテープでわかる。

○音楽の場合は，テープがふさわしい。作曲の場合はどうするか。

○譜面が資料となる。作品がわかるものという表現になる。

○資料に共通性を持たせるには，条件をつける。プレゼンファイルのようなもので，大きさを決め，その範囲内で資料を提出してもらう。資料の多少については応募者に任せる。

○本人の概要や活動履歴関係は資料に記載されているようなもので良いか。

○フォーマットを固め，原案を出し，それを修正することで決めていきたい。参考資料についてはＣＤやビデオを入れるプレゼンファイルで，大きさは事務局で決めていただきたい。

（４）選考委員について

○委員の皆様からのご意見からギャラリーとホールを 1 年おきに募集するという形になる。ギャラリーとホール関係から選考委員の候補者を上げていただきたい。市から委嘱するので最終的には事務局に一任いただきたい。
○地元の委員を常任委員のような形で設けるのか。1 次選考で地元の委員で選考して 2 次選考で全員外からの委員にするのか。1 次選考でジャーナリストにお願いし，2 次選考で専門家にお願いする。
○5 人にした場合ジャンルの委員は。
○常任委員を 3 人とするか。臨時委員はあらかじめ選んでおいてその都度お願いする。地元の委員は臨時委員の中に複数入れておいて，その都度変えていく。
○ピアノの先生が管楽器を選考することは難しい。
○日程は募集要項が５月頃，周知を１，２か月行い，応募の締め切りが早くても７月か８月。応募の状況で選考委員を決めることになると，お願いするのに１，２か月必要となる。
○大学設置の審議委員の場合は，２期に限定して複数お願いしておく。その中から２，３人をお願いしている。
○発表は何月ころ予定しているか。
○表彰は，平成 14 年 5 月の芸術祭開幕式に行なう予定をしている。新聞等の発表は 3 月ころの予定。この時点では，選考委員も名前を挙げて選考理由等を発表する。
○発表が 3 月であれば最終審査は１月頃か。
○３月に決まれば良い。
○そうであれば，締め切りはもっと遅くても良いのではないか。
○選考委員があらかじめ決まっていれば，もっと遅くても良いと思うが，応募状況によって選考委員を決めることであれば，期間を十分とっておく必要がある。
○選考委員も高名な人であれば別だが，何カ月かあれば時間調整をすれば一日くらい来てもらえると思う。
○先生方の意見を勘案して事務局である程度まとめていただきたい。できれば，常任委員と臨時委員という考え方が良いと思う。
○考え方としては常任委員と臨時委員という２つのタイプ。１次審査的なものについてはある程度地元の先生方にお願いする。
○１次選考については，ジャーナリストにお願いしたほうが当り障りがなく良いと思う。
○ジャーナリストといっても芸術関係に理解がない人にお願いしてもどうかと思うがいかがか。ジャーナリストに限定せず地元の人ということでいかがか。
○一般の方が納得できれば良いと思う。
○委員の皆様からのご意見で概ねまとまってきたと思う。書類として整理して先生方にお渡ししたいと思う。選考委員については，具体的に中央の先生とのパイプを持

っていないので，委員の皆さんに知恵を拝借したい。
〇事務局で常任委員や中央からの特別委員の人数を整理していくことで良いか。
〇事務局で原案を固めていただくことでお願いしたい。